○プロジェクト研究2063-3

研究課題「持続可能な多職種連携に向けたシステム開発」

○研究代表者　看護学科・教授：加納尚美

○研究分担者

看護学科・教授：髙村祐子　准教授：大江佳織　糸嶺一郎　助教：土居岸悠奈　深見美希
理学療法学科・教授：水上昌文　准教授：松田智行　篠崎真枝
作業療法学科・講師：伊藤文香
医科学センター・教授：馬場　健　准教授：角　友起　人間科学センター・講師：海山　宏之

○研究協力者

看護学科教授：吉良淳子　富田美加　中村博文　藤岡寛　山口忍
助産学専攻科教授：島田智織
東京情報大学看護学部教授：松下博信　文京学院大学保健医療技術学部教授：藤谷克己

○研究年度　令和　4　年度
（研究期間）　令和2年度～令和4年度（3年間）

1. 研究目的

研究1：「IPEによる教育効果の促進及び成果評価に関する研究」として、IPEコースの各科目でコアコンピテンシーを踏まえ、さらにアンケート内容を精選した調査を実施することによって、これまで評価しきれなかった学生の学習効果を評価する。

研究2：「持続可能な多職種連携に向けたシステム開発：茨城県内の保健医療福祉施設における多職種連携協働の実際」では、茨城県内の多様な保健医療福祉の場における多職種連携協働の実態を把握する。

研究3：「茨城県における高度実践看護師および認定看護師等に関するニーズ調査」として、高度実践看護教育案と実践状況についての県内の各医療関係の職能団体および保健医療施設にニーズ調査を行い、持続可能な多職種連携に向けたシステム開発の基礎データにする。

2. 研究方法

研究1

2020年度～2022年度にIPEコース3科目をそれぞれ履修した学生を対象に、各科目の授業最終回終了後にCloud　Campus上または直接配布にて質問紙調査を実施した。研究の同意の得られたものを対象とし、個人が特定されないようにコード化、それぞれの項目についてスコア化した。単純集計後、項目ごとに前年度の平均値を比較した。また2020年度入学生においては、1年次調査結果と2年次調査結果を縦断的に分析し、自由記述についてはコミュニケーションに着目し、内容分析で質的に分析した。またチームワーク入門実習とチーム医療演習の自由記載の回答はテキスト形式にデータ化し、フリーソフトウェアのKH Coderを利用してテキストマイニングの手法で分析した。

研究2

茨城県内で同意が得られた2つのリハビリテーション病院A、B病院において、①基本的属性10項目②多職種連携協働スケール(AITCS-Ⅱ-J)23項目、③多職種連携協働リーダーシップ評価スケール(AICLS)27項目、④心理的安全性7項目、⑤職場組織8項目、⑥組織学習23項目、⑦医療安全28項目、⑧職務満足度・主観的幸福感・主観的健康観3項目の全119項目および多職種連携協働に関する意見（自由記述）の調査を行った。調査期間はA病院が2021年1月～3月、B病院は2022年12月～2023年1月であった。分析方法は、調査項目②～⑧については各々の病院において職種ごとに平均値を算出した。また単純集計後職種別に比較検討した。自由記載については研究者2名職種をいくつかの部門にまとめメディアン検定で比較した。自由記述については研究者3名で内容分析を用い、多職種連携を促進するために必要なことおよび阻むものについて質的に分析した。

研究3

研究の趣旨を理解し研究協力に同意を得られた茨城県内の職能団体、保健医療施設等に所属する管理職または管理職に準ずる者とする。調査内容は、高度実践看護等に関する理解を含むものである。調査方法は、協力者の希望により、紙媒体のアンケートまたはグーグルフォームで行うことした。倫理委員会の承認を得て、2021年11月～2022年1月末にて調査を行い分析した。

＊すべての研究は、茨城県立医療大学倫理委委員会の承認を得て行った。

3. 研究結果および考察

研究1

○「チームワーク入門実習」結果

新型コロナウイルス感染症の影響を受ける前の2019年度～2022年度の結果についてそれぞれ比較した結果、チームワークや多職種連携の定義・重要性の理解は、2020年度以降の方が高まっていたが、職種理解についての理解度は概ね差はなかった。2021年度以降は対面で大学見学やグループワークを行ったため、実際の見学・体験によって得られた学びもあった。新型コロナウイルス感染症の影響により、毎年実施方法を変更していたが、授業の学習目標は達成できていた。しかし臨地実習ができなかった影響はあり、今後も付属病院と協働し授業運営を検討していく必要がある。

○「保健医療とチームワーク演習」結果　:1-2年次の経年変化

1年次(2020年度)と2年次(2021年度)の結果について、縦断的に分析した。チームワークや多職種連携の定義の理解には差はなかったが、重要性の理解は1年次の方が高く、職種理解においても、医師以外の全てで1年次の方が高かった。質的分析の結果、1年次には〈基本的コミュニケーション技能〉や〈伝わるように話すこと〉、〈他者の価値観を受け入れる〉など一般的なコミュニケーションに対する記述が多く、2年次には、”他職種、多職種“という用語が意識され、〈他職種の専門性を理解すること〉、〈多職種の意見を取り入れる姿勢〉に対する認識の高まりが示唆された。加えて〈他職種に分かりやすいように自職種の視点を伝えること〉の困難さや重要さが記述され〈自職種に対する専門性を高めること〉の重要性についての意識の高まりが理解された。

○「チーム医療演習」結果

チームワークや多職種連携についての定義や理解については、2019年度と比較し、2020年度・2021年度は低下しなかった。一方、医療専門職の理解については、2020年度は2019年度と比較し、低下したが、2021年度には高くなった。症例検討について、面接授業(対面)を行ったことにより、職種理解が深まるなどの影響が示唆された。自由回答をテキストマイニングした結果、【患者・家族により良い医療を提供するためにチームで関わること】【自職種や他職種の役割の理解】【事例検討を通して支援の在り方を学ぶ】などが本科目で学んだこととして挙げられた。各年度の特徴語を抽出すると、2021年度の特徴語として「専門」「理解」「職種」が抽出され、専門性の理解や職種理解について学生が意識していたことが示唆された。

研究2

(1)119項目の調査結果について

A病院では55名から回答を得た(回収率34.2%)。 B病院では58名から回答を得た(回収率30.1%)。
A病院とB病院の全職員の全119項目での比較では、医療安全の28項目全てで有意差を示した。また多くの項目でA病院の平均点がB病院を上回る傾向が示された。各々の病院の設置主体をはじめとする様々な背景や機能の特徴、就労環境の違い等が職員の回答(意識)に影響していることが推測される。

(2)自由記述について

自由記載については、促進および阻害するものについて、2つの病院の傾向は類似していた。多職種連携を促進するためには他職種の理解と人としてのリスペクトを基盤とし、日頃の気軽なコミュニケーション、より良い雰囲気、信頼関係を気付くことが必要である。そのためには個々のスキルの向上、自己中心的態度の改善、リーダーの明確化、連携を話し合う部会の設置などが必要となる。

研究3

茨城県7団体から33名および保健医療機関の106名の多職種から回答があり、NPの必要性は4割弱から得られたが、具体的内容の理解は十分とは言えないことが分かった。

4. 成果の発表

1. 松田智行，糸嶺一郎，大江佳織，海山宏之，加納尚美．遠隔授業における多職種連携教育に関する知識及び医療専門職の理解について―「チーム医療演習」の学生アンケートより―．茨城県立医療大学紀要．Vol.27．17-24．2022
2. 大江佳織，糸嶺一郎，土居岸悠奈，加納尚美，髙村祐子．オンラインによるチームワーク入門実習の学習成果の検討.茨城県立医療大学紀要．Vol.28 掲載予定
3. 土居岸悠奈，糸嶺一郎，大江佳織，加納尚美．オンラインによる IPE 学習成果の検討．第 14 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会（つくば）2021 年 11 月
4. 大江佳織，糸嶺一郎，篠崎真枝，土居岸悠奈，髙村祐子，加納尚美．ブレンド型授業方式による IPE の学習成果の検討．第 15 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会（新潟）2022 年 11 月
5. 髙村祐子,加納尚美,伊藤文香,篠崎真枝,松下博宣,藤谷克己,大江佳織,松田智行,糸嶺一郎,回復期リハビリテーション病院に勤務する全職種における多職種連携協働の実態調査,第 60 回全国自治体病院学会(沖縄)2022 年 12 月